寄稿・シリーズ

◎ 多治見市モザイクタイルミュージアム 受託記念展 広正製陶・半谷孝コレクション

「世界へ羽ばたいた和製マジョリカタイル 金型の精緻・精巧美の世界」

フリーランス編集者 加藤 郁美

図 1 佐治タイル

図 2 淡陶

図 3 月星建陶社（曽根磁叟園製陶所）

1. 和製マジョリカタイル評価の今

近年、大正・昭和初期に日本が輸出した和製マジョリカタイルが、海外で観光資源として注目を集めています。台湾では 2016 年に古民家から蒐集した和製マジョリカタイルを展示する台湾花磚博物館が開館、シンガポールやマレーシアでは中国系の人々が築いたプラナカン建築文化を彩る和製マジョリカタイルが注目されて、いずれも、人気の観光スポットになってきています。

日本側からの調査としては、2014 年に近畿大学の豊山亜希氏がインドで和製マジョリカタイルを確認し論文を発表、2018 年に長崎大学の増田研氏がアフリカのザンジバルで和製マジョリカタイルが多く残されていることを発見、兵庫県立考古学博物館の深井明比古氏とともに進められているその考古学的調査の成果は、佐治タイルが顧客に配った壮大な輸出先鳥瞰図（図 4）が現実のものであったことを、まざまざと感じさせてくれました。

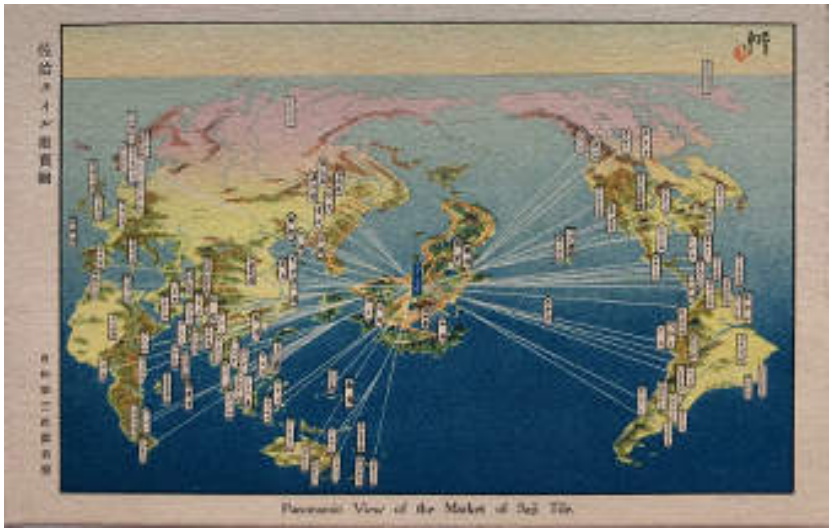

図 4「佐治タイル販売網」昭和 12 年。観光名所絵図や電鉄沿線絵図を独特な鳥瞰図で描いた人気絵師・吉田初三郎に発注し、顧客に配られた絵葉書。名古屋を中心に、グリーンランドからケープタウンまで放射線状に広がる驚くべき販売網。

タイルメーカー側が保存する産業遺産としては、淡路島・淡陶が保存する中国向け和製マジョリカタイルの金型とタイルがあるのみでしたが、2018 年、名古屋・広正製陶の半谷孝氏がインド輸出向け和製マジョリカタイルの金型を保存していることが判明し、岐阜県の多治見市モザイクタイルミュージアムに寄託されることとなりました。本展は、この貴重な金型と、豊山亜希氏が撮影してこられた、今も和製マジョリカタイルがその壁面を飾っているインドの邸宅や市街の写真をあわせて展示するものです。

2. 半谷孝コレクションとの出会い

筆者は、戦後のモザイクタイル生産日本一の町である岐阜県多治見市笠原町でタイルの魅力に出会い、『にっぽんのかわいいタイル：昭和レトロ・モザイクタイル篇』を上梓いたしました。続編の『大正篇』のために、大正・昭和初期に和製マジョリカタイルを製造したタイルメーカーの子孫の方々を探していた中で、不思議な形で出会えたのが、広正製陶の半谷家の方々です。2014 年、別件で取材に伺ったタイルアート工房の事務机のビニールシートの下に 30 年間はさまっていたカタログにより広正製陶の名を知りました。そこから北名古屋の徳岩寺さんの山門前に創業者・半谷音吉氏の銅像があることがわかり、お寺をたずねて墓参したあと、ご住職さんに、子孫の方へのご紹介をお願いしたのです。そうしてお会いできたのが、創業者の次男で、和製マジョリカタイル製造時の工場長だった半谷孝氏でした。和製マジョリカタイル製造の現場を語ることのできる、おそらく最後の証言者でいらっしゃいました。その孝氏が、昨年 2019 年 12 月に 93 歳の生涯を閉じられるほぼ 1 年前、「実はインド向けの輸出用和製マジョリカタイルの金型を保存している」と、娘さんを通じて知らせて下さいました。インド向けの輸出タイル用金型は、それまでひとつも現存が確認されたことが無かったので、 びっくりして名古屋に参上したところ、孝氏は、63 点もの真鍮金型を保存しておられました。うち 14 点がインド向け、しかも 8 点が、ヒンドゥー教の神々の姿を精密に描いた 2 枚～9 枚組のパネル画の金型という驚くべきコレクションでした。タイルの原料の粉砕土をプレスするための道具でありながら、それ自身、精緻な工芸品と言える美しさをもっていました。

図 5 広正製陶金型「ダッタートレーヤ」

図 6 広正製陶金型「タージ・マハル」

図 7 広正製陶金型「ヴィシュヌ」

これらの金型は、15 センチ四方、厚さ 7 ミリというサイズにもかかわらず、重さは 1 枚 1.3 キログラムもあります。それを 63 枚。酸化して黒くならないように、一枚一枚機械油を塗り込み、紙に包んで、1970 年代初頭に操業停止したのち半世紀に渡り、大切に保管しておられたのです。創業者である父と、和製マジョリカタイルの製造に心血注いでいた若き日への、孝氏の思いの深さに胸を打たれました。

3. なぜヒンドゥー教の神々なのか？

日本がヒンドゥー教の神々をモチーフとしたタイルを製造していたその訳は、インドがイギリスの植民地であった状況と深く関わっています。広正製陶がインドに輸出を始めた 1932 年（昭和7年）は、マハトマ・ガンジーが反英・独立の「塩の行進」を行なった 2 年後でした。（インドに残されている和製マジョリカタイルでは、佐治タイルの製品が質・量ともに抜きん出ているため、佐治タイルの方が早くインドへの輸出を始めたと推測できますが、佐治タイルは社史を残さなかったため、はっきりした年代がわかりません）。イギリス製品は買わない、自国製品を買おうという運動が高まり、日本製タイルは、それまでインドを席巻していたイギリス製のマジョリカタイルに代わる製品として需要を伸ばします。そのシェアはインド国内流通品の 5 割にまで高まりました。

インドの旧家に貼られているマジョリカタイルが日本製であることを発見したのは、近畿大学の豊山亜希氏です。インド美術史が専門の豊山氏は 2014 年、植民地下で財を成した新興商人の邸宅を調査している際、落剥したタイルの跡の漆喰に、「MADE IN JAPAN」の文字が残っていることに気づきました。日本タイル史の資料にインドが有力な輸出先だったことは記録されてはいましたが、こんなにも特異なデザインで、しかも大量に今も残されていることは、誰も想像だにしなかったことでした。

図 8 広正製陶金型「サラスヴァティー」

図 9 佐治タイル「サラスヴァティー」

図 10 「サラスヴァティー」カレンダー

和製マジョリカタイルのヒンドゥー教の神々は、神々を描くときの伝統的な決まり事を正確に守って描かれています。インドの文化のことを何も知らない日本のタイルメーカーに、何故そんなことが可能だったのか？豊山氏は、そのデザイン・ソースについても解明しました。それは、インドの国民的画家、ラージャー・ラヴィ・ヴァルマーの絵画作品です。ラージャー・ラヴィ・ヴァルマーは、ヒンドゥー教の神々の姿や、神話の一シーンを生き生きと描いた油彩画で人気を博し、裕福な人びとはその複製画を邸宅に飾っていました。ラージャー・ラヴィ・ヴァルマーはさらに、自ら油彩画を石版画にして大衆のもとにとどけるというプロジェクトを実行します。作品の複製画は石鹸のポスターやカレンダーともなり、庶民の家々や店舗にも飾られることになりました。彼の描法は新鮮なものでしたが、神々の容貌や、手にする持物、従えている動物などは、伝統的な描き方を守っており、それによって、ラージャー・ラヴィ・ヴァルマーの作品はやがて、インドの人びとの自国文化への誇りや民族独立の願いを表す象徴的な図像ともなっていったのだそうです。

半谷家のアルバムに一葉の集合写真が残っています。それは、いつも広正製陶にこなしきれない程大量の注文を出してくれた、日本に居留するインド人商人・タッカル氏とその家族が、1937 年（昭和12年）の

名古屋汎太平洋平和博覧会を観るために半谷家に泊まりに来た際の記念写真です。インド向けも含め、輸出品は同社の事業の 4 割を超えるようになっていました。半谷孝氏の証言によれば、タッカル氏はいつもヒンドゥー教の神様の複製ポスターを持ってきて、「これと同じ図柄で」と、発注を行なっていたそうです。

図 11 タイル貼りの広正製陶社屋の前で写真を撮る半谷一家とタッカル一家。『半谷音吉伝』の記述および、半谷孝氏の記憶では、タッカル商会は神戸の商社、とされていますが、豊山氏の調査なさった複数資料によれば、大阪の商社となっているとのことです。

4. 和製マジョリカタイルのオリジナリティー

図 12 石鹸ポスター「ラクシュミー」

図 13 佐治タイル「ラクシュミー」

図 14 広正製陶金型「ラクシュミー」

和製マジョリカタイルの神々像と、元絵となったラージャー・ラヴィ・ヴァルマーのポスターを並べて見ていた時、最初は構図や、神々の容貌・仕草・持物・従える動物をしっかりと再現していることに目がいっていたのですが、ある時、背景描法の違いに気がつき、はっとしました。ラージャー・ラヴィ・ヴァルマーの背景風景画は、レオナルド・ダ・ヴィンチやクロード・ロランが駆使した欧州伝統の空気遠近法で描かれています。前面に暗色を置き、中層には褐色や緑の樹々の葉、流れる水は奥にゆくほど淡い色彩にぼかし、最奥に青くけぶる森（図 10）や山（図 12）を置くことによって、空間的広がりを表現しています。それに対し、和製マジョリカタイルの背景は、白い凸線によって明確に色面分割し、大胆に図案化されたアール・ヌーボー様式で表現されていたのでした。金型によって凸線で絵柄を作り、区切られた面ごとに色鉛釉を置いてゆくマジョリカタイルの製法そのものを最大限に生かし、時代の流行を巧みに取り入れた製品が作り上げられています。産業製品には、この「新しさ」の感覚が欠かせません。

アール・ヌーボーふう風景画の和製マジョリカタイルは、佐治タイルが開発したものと考えられます。「佐治タイル」カタログにはタイルとしては珍しく「Saji」の署名の入ったタイルが掲載されていること、佐治タイルの品質・デザインの向上には、蔵前の東京高等工業学校（現東京工業大学）出身の五十鈴隆吉の貢献が大きかったとされているためです。
ドイツ・ベルギーでの 3 年間の調査留学から、多くの参考品を持ち帰り、「新マジョリカ（ドイツふうマジョリカ）」こそが、新しい輸出用製品開発の手がかりになるという、平野耕輔教授の主張をカリキュラム展開していた東京高等工業学校のひとつの成果がここにあると考えられるでしょう。

図 15『大日本窯業協會雑誌』

図 16 ドイツ製風景タイル

図 17 佐治タイルカタログより

図 18 佐藤化粧煉瓦工場

5. 輸出先文化とのコラボレーション

今回の展示とは少し離れますが、中国輸出向けの和製マジョリカタイルも少し見て見ましょう。最初に上海に和製マジョリカタイルを輸出したのは名古屋の不二見焼で、1920 年（大正9 年）のこと。これは日本のタイル製品輸出の先駆けでもありました。

図 19 中国の木版年画

図 20 不二見焼、吉祥果物と蝙蝠

図 21 淡陶、吉祥果物

不二見焼は当初、イギリスのマジョリカタイルを真似た模様的な製品を中国に送っていましたが、上海の商社から「こうしたタイルは我々の興味を引かない。もっと違うデザインのタイルがほしい」と求められます。不二見焼は、上海の商社と漢文の手紙をやりとりしながら、中国向けのデザインに工夫を重ねます。社長の村瀬六郎は1929年（昭和4）、満州・華北への視察旅行に出発し、悪化しつつある日中関係のなかでも信頼関係を築き、中国の人びとが家に貼って福を願う「木版年画」を蒐集して帰国しました。中国の絵画や建築装飾は、描かれた物の故事、同音の言葉の連想遊びなど、幾重にも意味が張り巡らされたもので、単なる図柄ではありません。観る人に絵解きをさせない図像、メッセージを伝えない図像には価値が無い

とされます。こうして不二見焼は、目出度い意味をもつ果物（桃は長寿、仏手柑は福、ザクロは子だくさん）を盛り合わせた「吉祥タイル」を作り上げました。「裕福になる」という意味を持つ蝙蝠や、「夫婦円満」の意味を持つ蝶々をあしらったタイルは、新築の家屋を飾るのにふさわしいものとして喜ばれたことでしょう。インド向けの輸出品でも中国向け輸出品でも、大衆に愛された印刷メディアが参考にされて製品開発が行われたことも、たいへん興味深い点です。

6. 濃尾から世界へ

和製マジョリカタイルのメーカーは淡陶をのぞき、濃尾（岐阜・愛知）地域に集中していました。濃尾地域からのタイル輸出が盛んだった理由として、日本陶磁器意匠センター櫻井健二郎氏は、名古屋港・神戸港に商社が集まり、発注があれば各製陶所に効率的に発注・集荷して、一挙に船に積み込むシステムが出来上がっていたことを、馮赫陽氏は濃尾の製陶所は明治時代からすでに中国の人びとの嗜好に合わせてデザインを工夫し輸出量を増大させていたことを、指摘しています。こうした実績があったことが、愛知・岐阜のメーカーの中国・インド向けのタイル輸出増大の基礎になっていたと考えられます。欧州製よりも値段が安かったということはもちろんありますが、一方的に欧州デザインを押しつけるのでは無く、先方の文化のもつ考え方や好みに応えつつ、世界的な流行デザインも加味して製品を開発してゆく、そこに和製マジョリカタイルの世界的普及の秘密がありました。

図 22 不二見焼

図 23 月星建陶社（曽根磁叟園製陶所）

図 24 佐治タイル

一方、今現在のわたくしたちが和製マジョリカタイルに感じる魅力とは何でしょうか。戦前の焼き物ならではの釉薬の美しさがひとつ。もうひとつは、和製マジョリカタイルの、どこか奇妙な味わいにあると考えます。和製マジョリカタイルの作られた時代、大量生産技術と帝国主義によって物品はグローバルに流通し始めていましたが、人びとはまだ他国の文化に直に触れる機会がありませんでした。商売の必要に駆られて相手国の文化を手探りし、「こんな感じかな？」と焼き上げられた和製マジョリカタイルは、リアルなようでリアルでない、過剰なイマジネーションの産物なのです。異文化への憧れというより、必死の企業努力。製造業としての気概や意地が生み出した時代の産物。そこにこそ、産業美術の面白さ、愛おしさがあると感じています。

（＊図 9、10、13、15～24 は出品物ではありません）

【展覧会情報】

受託記念展:　広正製陶・半谷孝コレクション
「～世界へ羽ばたいた和製マジョリカタイル～　金型の精緻・精巧美の世界」展

会　期:　2020 年 9 月 19 日（土）～2021 年 1 月 11 日（月・祝）

会　場:　多治見市モザイクタイルミュージアム　3F ギャラリー
岐阜県多治見市笠原町 2082 番地の 5
TEL: 0572－43－5101
HP:（https://www.mosaictile-museum.jp/）

開館時間:　午前 9 時～午後 5 時

休館日:　月曜日、年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）

入場料:　一般 310 円、団体 250 円（20 名様以上）、高校生以下無料
（常設展観覧料でご覧いただけます）

企　画:　加藤郁美

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため制限を設けながら開館しております。
　土・日・祝日　入館は事前予約制。体験工房は閉鎖します。
　平日　見学のみの場合予約不要。体験工房は予約制。